

美濃須衛古窯跡群

寒洞窯址群

編集 岐阜県各務原市那加
門前町3丁目1-3
発行 各務原市埋蔵文化財
調査センター
TEL 0583(83)1123(代)
平成8年3月29日



1. 1号窯址焼成室須恵器出土状況

■美濃の古代やきもの生産地

寒洞窯址群は、美濃須衛古窯跡群（以下、美濃須衛窯と略す。）のひとつで、奈良時代から平安時代にかけて、須恵器というやきものを焼いた窯址群です。

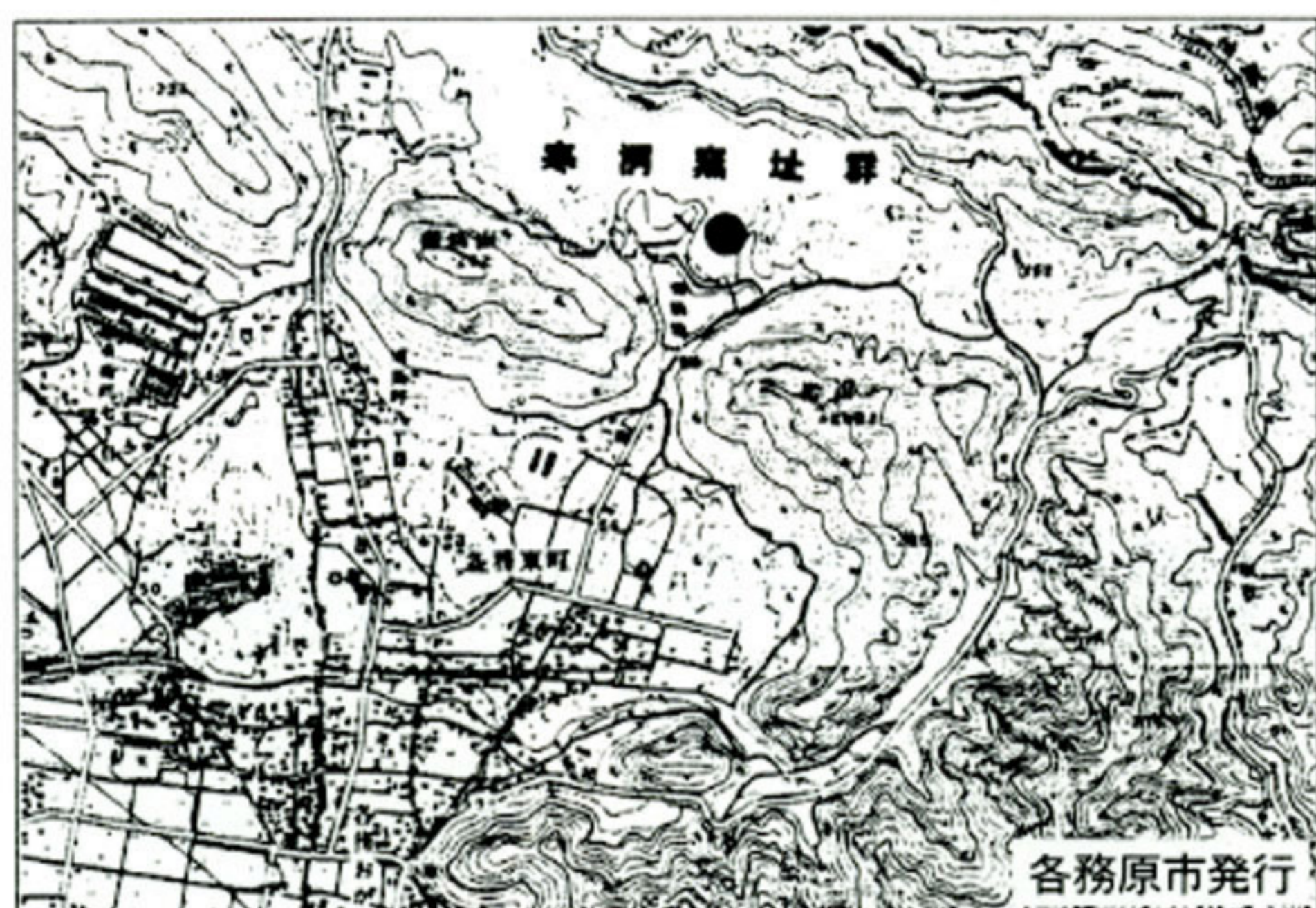
美濃須衛窯とは、各務原市の北部山地を中心として、関市南部や岐阜市東部の山地に広がるやきもの生産遺跡のことです。いまから1500年ほど前の古墳時代後期（6世紀）に始まり、700年ほど前の鎌倉時代中期（13世紀）に廃絶したと考えられています。その間、約700年間にわたって須恵器（古墳～奈良・平安時代）・灰釉陶器（平安時代）・山茶碗（鎌倉時代）など、それぞれの時代に使われたやきものが焼かれ、古代美濃地域におけるやきもの生産の中心地でした。「美濃須衛窯」の「須衛」とは、遺跡の中心地である各務原市須衛町の「須衛」の地名に由来しています。また、この「須衛」は、やきものの「陶（トウ・スエ）」に

由来し、江戸時代までの古文書には、「須衛」地区を「陶器所」と書いています。窯址は、現在美濃須衛窯全域で120カ所ほどが確認されています。

■寒洞窯址群と周辺の窯址

寒洞窯址群は、各務原市と関市の境をなす金山（標高348m）から、南にのびる丘陵先端の南斜面にありました。現在ではゴルフ場によって周辺の地形が変わっていますが、寒洞の谷はこの丘陵先端をはさんで左右にわかれ、それぞれの谷はさらに小さな谷を丘陵に刻んで延びています。

そうした谷には、かつて、寒洞窯址群以外にも多くの窯址が存在していましたが、このことは、この谷の全域が、当時のやきものを焼く窯を作るのに適した環境にあったからだと考えられます。窯を焼く際の燃料となる薪や、やきものの材料でもある粘土、そして、



2. 寒洞窯址群位置図



3. 寒洞周辺の地形図 ●—寒洞窯址群



4. 寒洞窯址群発掘後全景



5. 2号窯址灰原須恵器出土状況

それをこねるための水など、「地形・燃料・粘土・水」という窯を作る条件を満たす場所が好適地として選ばれました。

■寒洞窯址群の発掘調査

昭和58年にゴルフ場のコース変更工事により、寒洞窯址群の現状保存が困難となりました。そのため、工事に伴う緊急調査として寒洞窯址群の発掘調査が実施されました。調査をすすめたところ、窯址2基（1・3号窯址）と調査区域外に位置する別の窯址（2号窯址）の灰原1カ所があきらかとなりました。このうち、最初につくられたのは3号窯址です。次いで1号窯址、そして、もっとも新しい窯が2号窯址です。なぜそのようにそれぞれの窯の時期の違いがわかるのかといいますと、窯を焼くときには大量の薪を燃やします。そして、その薪の一部は、ある段階で炭として燃え残り、燃え残った炭は窯からかきだされ、そのまま丘陵斜面の下方に捨てられます。その炭や灰がある範囲に堆積したものが「灰原」と呼ばれる炭や灰の捨て場です。また、この灰原には、焼きあげに失敗した製品も大量に捨てられています。

発掘調査ではそれらの捨てられた製品をすべて重要な資料として取り上げ保存します。歪んだり欠けたりした雑多な失敗品ですが、決して美しいとは言えないその「もの」たちは、かえってその真実の姿を私たちに見せてくれます。私たちはそうした「もの」たちから、その窯の年代についての手がかりや、当時の社会のあり方・文化の内容について多くの重要な情報を得ることができるのです。

さて、別々の窯址が接近して作られている場合など、この灰原がある部分で上下に堆積し重複していることがあります。この状態が調査で確認されれば、それぞれの窯址の新旧関係が決定できることとなります。寒洞窯址群も、調査で3号窯址の上に1号窯址の灰原が堆積し、さらに3号窯址と1号窯址の上には2号窯址の灰原が堆積していることが確認されましたので、3号、1号、2号の順に丘陵の上方に向かって次々と窯が作られて行ったことが判明したのです。

■3・1号窯址の構造

3号窯址と1号窯址は、どちらも丘陵斜面の地下を傾斜をつけてトンネル状に掘り抜いた窯です。窯の燃

料を燃やす^{ねんしょうしつ} 燃焼室こそ、地上から縦穴で掘り込んでいましたが、燃焼室と製品を詰めて焼きあげる^{しょうせいしつ} 焼成室の境から窯の先端の煙出し部^{けむりだ}までは、まったくの地下式窯で、アーチ形の天井の厚みは1.0~1.3mと大変分厚い状態でした。

3号窯址は、燃焼室の幅が2.7m、長さが2.8mで平面形が隅丸三角形を呈しています。このような縦穴状の燃焼室は全国的にもめずらしく、奈良時代後半から平安時代前半にかけての美濃須衛窯独自の構造なのかも知れませんが、焼成室の長さは6.5mで、幅は最大2.4m、天井までの高さは最高で1.9mありました。燃焼室と焼成室との境は、天井及び両側壁から絞り込まれ、幅が95cm、高さが65cmのアーチ状を呈しています。この部分はいわゆる障壁^{しょうへき}と呼ばれ、通常、窯への製品の出し入れに際して壊されて残らない場合が多いのですが、3号窯址では幸いにも完全な状態で残っていました。

焼成室の先端は壁が1.2mほどたちあがり、50×70cmの楕円形を呈する煙出し孔となっています。窯の先端部がたちあがる形態となっていることも他にあまり例がなく、今の段階では、美濃須衛窯でもこの寒洞3号窯址と1号窯址でのみ確認できる構造です。なお、焼成室の平面形態は、手前の障壁部近くで最も広く張り出し、先端部に行くにしたがって幅を減じ細くなっています。

焼成室の床面には、製品の破片が多く残っていました。それらは失敗品をかたづけ忘れたものや、窯を焼く際にもものが床に安定するようにと、製品をのせる台^{しょうだい} (焼台) に転用したものなどです。

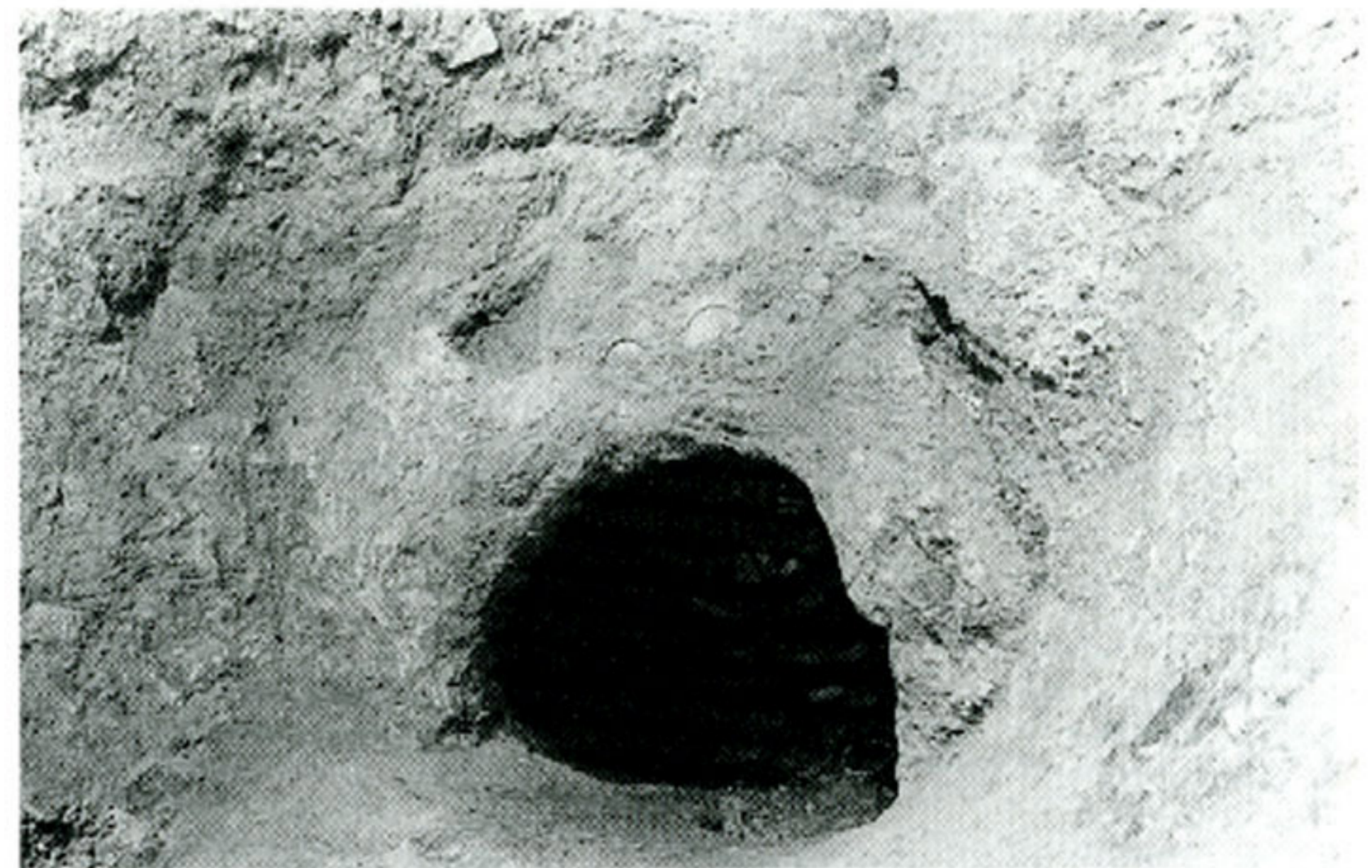
1号窯址の燃焼室は、3号窯址と同じく平面が隅丸三角形を呈し、規模は幅が3.7m、長さが2.1mです。燃焼室と焼成室の境は残念ながら壊されていましたが、やはり障壁状となっていました。焼成室の長さは5.3mと3号窯址よりも短く、幅も最大で1.8mです。平面形態は、幅がほぼ一定のまま先端部へと続く長方形で、先端部でたちあがった後、55×50cmの方形を呈する煙出し孔へと続きます。焼成室の床面には、3号窯址と同じく多くの製品の破片が残っていました。

■寒洞窯址群とその時代

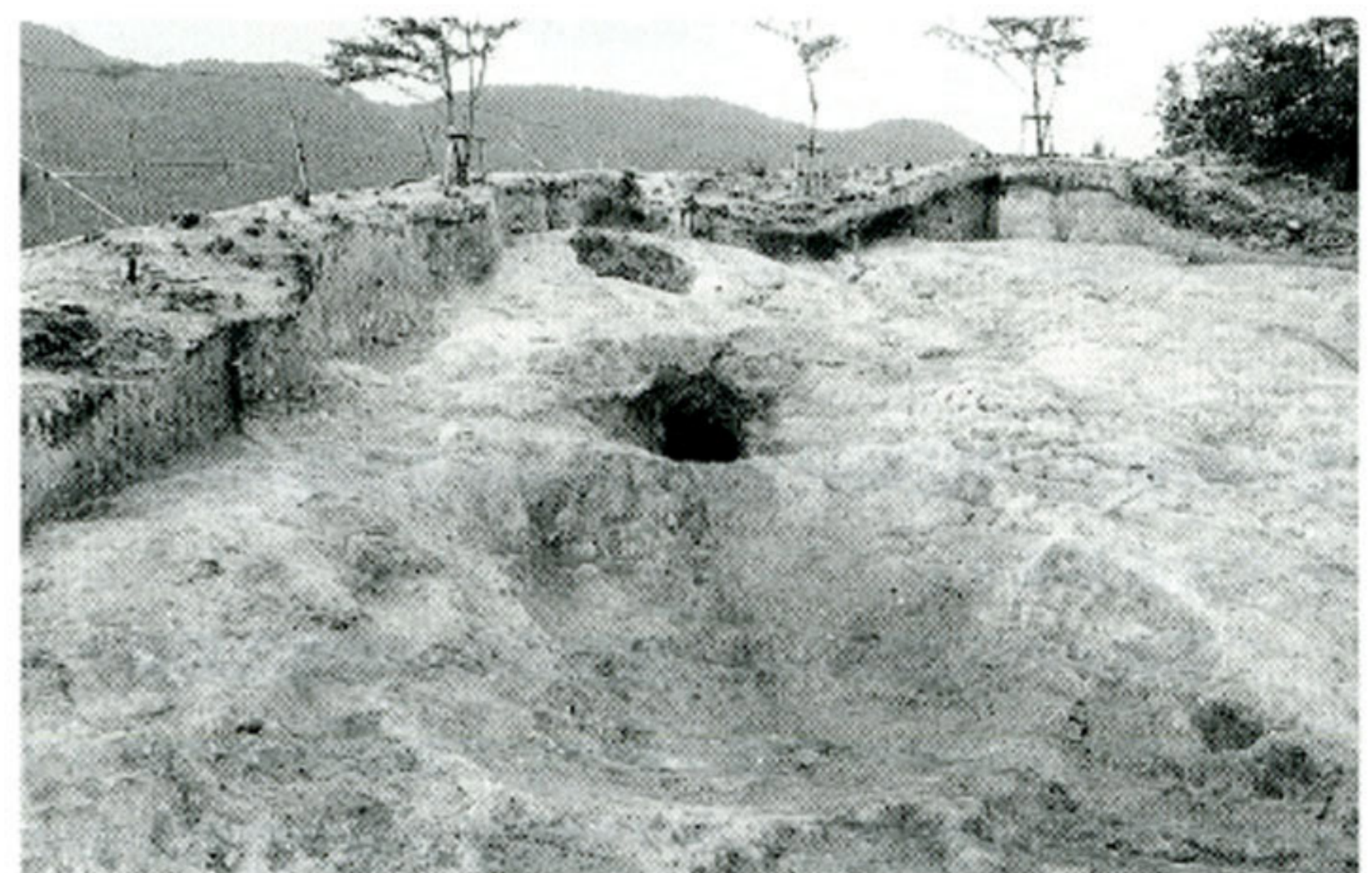
寒洞窯址群の発掘調査からは、多くの貴重な資料が得られました。まず、3号窯址と1号窯址の構造の違いがあげられます。それは奈良時代に多くみられる大



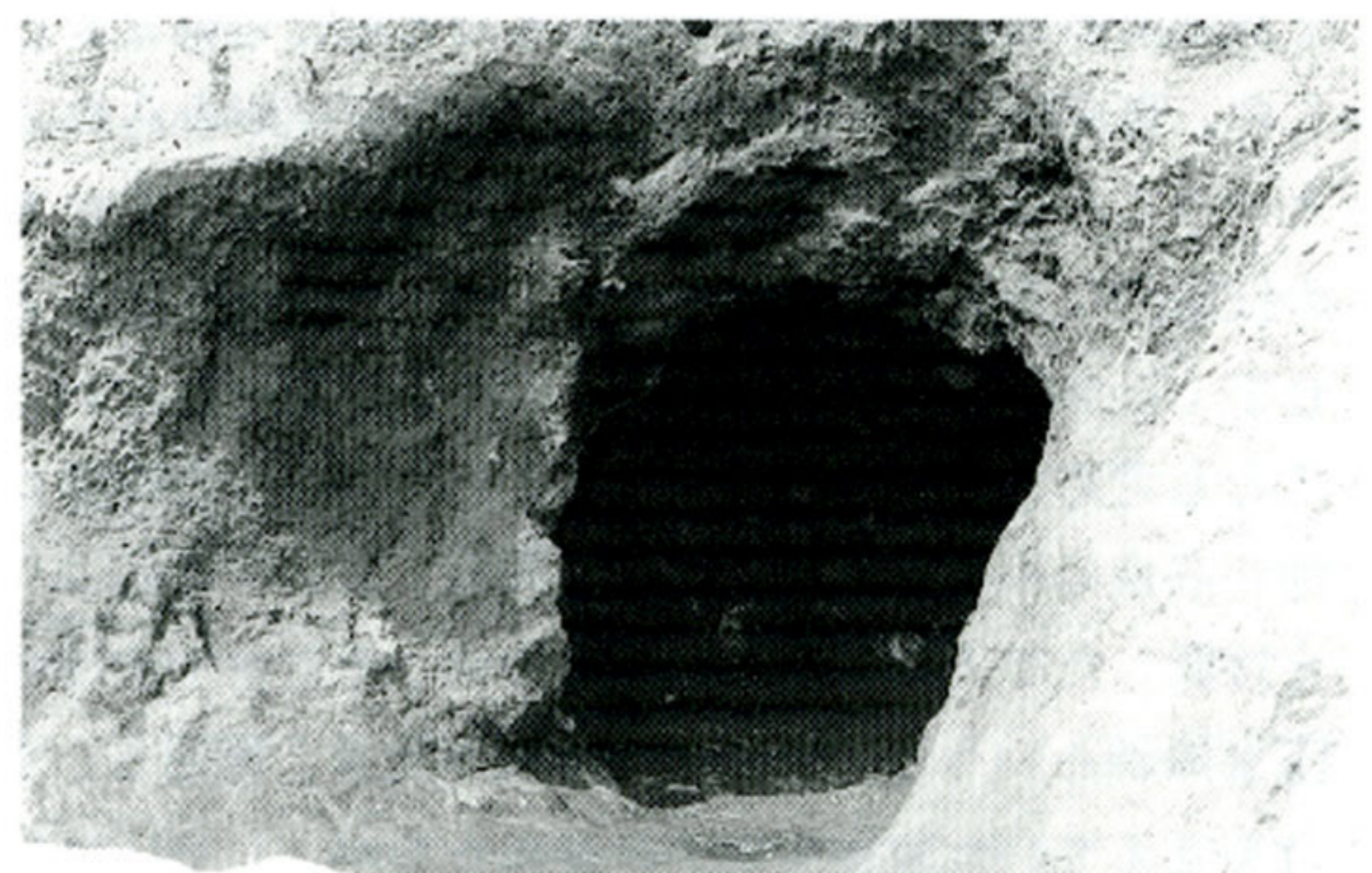
6. 3号窯址全景



7. 3号窯址障壁



8. 1号窯址全景



9. 1号窯址障壁部



10. 寒洞窯址群出土須恵器

型の形態と、平安時代以降にみられる小型の形態の違いでもあります。

1号窯址の灰原からは、奈良時代の美濃須衛窯では生産されていなかった碗の形をした製品が見つかっていますので、可能性として1号窯址が奈良時代の終わりから平安時代の初めにかけてつくられ、3号窯址はそれ以前の奈良時代終わり頃のものと考えられます。この、奈良時代と平安時代の窯の間に変化がみられるということは、単に当時の窯を操業していた工人たちの技術的な差というだけでなく、古代の窯業生産をとりまく社会的な背景に、何らかの変化があったということも考えられるのです。つまりそれは、この時期に都が奈良の平城京から京都の長岡京、次いで平安京へと移動したことに代表されるように、それまでの律令国家体制という古代官僚政治体制が大きく動揺し、それを支えていた貴族や地方の豪族たちが、しだいに独自の政治力を振るうようになったという社会の変化が、

当時の窯業生産体制にも影響を与えた可能性があるのです。特に美濃須衛窯の場合は、飛鳥時代後半代（7世紀後半）の律令国家体制整備期から急激にその生産体制を拡大してきた事実があり、その発展の背景として国による管理支配（官窯）が想定されています。その国の力に衰えが見え始めたとき、その庇護を受けていたと考えられる美濃須衛窯の須恵器生産体制にも当然何らかの影響があったのではないかと考えられるのです。いまはまだその具体的な様相はわかりませんが、結果として、およそ100年後の平安時代中期（10世紀）に、それまで400年間にわたって須恵器を生産し続けてきた美濃須衛窯は、ついにその生産を放棄して新しい灰釉陶器というやきものの生産を受け入れることとなりました。寒洞窯址群は、美濃須衛窯の須恵器生産がその繁栄の時代から衰退の時代へと転換する、激動の時代を生き延びた窯といえるのかも知れません。